

# 松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2016年5月9日 発行

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井宣光

## 熊本地震から1ヶ月

「縦に二回突き上げられたかと思ったら、今度は船に乗っているみたいに揺れた。

10秒くらいだったらしい。でもすごく長く感じた。」

（阪神淡路大震災当時の松蔭中学校1年生の手記より）

地震直後のテレビのニュースで、救助された一人の女性がまったく同じことを話しておられました。21年前の震災を体験した者にとっては、被災当時の神戸の様子と思いを瞬時に呼び覚ます映像が報道されています。活断層による度重なる直下型地震にみまわれた熊本・阿蘇地方は1965年から1994年まで中学修学旅行で、2011年から2013年の3年間は、東日本大震災により高校修学旅行先を東北から一時変更した地でもありました。今秋の中3修学旅行のコースにも組み入れ、被爆地長崎で平和について学び、阿蘇の壮大な大自然に触れることをテーマとする予定でした。松蔭生にとって関わりの深い場所が今は被災地となりました。（中3修学旅行については、旅程の変更を検討しています。概要が決まり次第、皆様にお伝えします）

被災されたご親戚やご友人、お知り合いがおられることと思います。犠牲となった方々のみ霊と、被害に会われた多くの方々への祈りを大切にしたいと考えています。

14日夜の最初の大地震発生から一夜明けた15日、今年最初の全校避難訓練を実施し、点呼終了後に次の話をしました。

「学校でもっとも大切なものは生徒であるあなた方の命、安全です。今回の地震は、阪神淡路大震災から21年、2名の生徒や多くの卒業生の命を失った松蔭に学ぶ者にとって決して人ごとではありません。私たち一人ひとりにとって今何ができるか。学校として何ができるかを一緒に考えたいと思います。」

さらに、学校にいる時は先生方の指示で避難をするが、登下校中など一人の時もある。家族と離れて災害にあうこともある。だから「自分の命は自分で守ること」「家族と離れて地震など大災害に遭遇した時にどうするか、あらかじめ家族と話し合っておくこと」の2点を伝えました。

保護者の皆様には、大災害が発生した場合のご家族の動きなどについて、お子様とお話し合いいただき、万一の際に備えてご確認いただくことを是非お願いする次第です。

## 被災者、被災地に寄り添って

聖書の舞台であるイスラエルなど中東、西アジア地域は日本と同じように地震が多いせいか、聖書にも地震のことがよくでてきます。イエスが十字架で息を引き取った時や、復活の際にも大地震がおこった話や黙示録の話はよく知られています。

主は、そこを出て山の中で主の前に立ちなさいといわれた。見よ、その時主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり山を裂き岩を砕いた。しかし風の中には主は居られなかった。風の後に地震が起こった。しかし地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし火の中には主は居られなかった。火の後に静かに囁く声が聞こえた。（列王記上19：11～12）

地震から週明けの全校礼拝で坪井チャプレンが『列王記』のこの箇所を朗読され奨励（お話）を行われました。阪神淡路、新潟中越、東日本、そして今回の熊本と、大地震がある度に自分は「神様は何ということをするのだ」と思うことがあった。これは神様から私たちへの「挑戦」なのかも知れない。阪神淡路大震災を経験した松蔭に学ぶあなた方、東日本大震災をその目で見たあなた方には、被災された方々の苦しみや悲しみに心を寄せ、何が自分にできるかを考えて欲しい、という内容でした。この3月末にも現高3生徒4名が東日本大震災被災地ボランティア活動で宮城県を訪問しましたが、今回の地震数日後には一部生徒からの申し出もあり、文化祭当日に生徒会やボランティアの生徒による支援の募金活動を行いました。イースター礼拝の献金とともに被災地に届けることにしています。

熊本市中央区のルーテル学院中学校高等学校（旧校名九州女学院。2001年校名変更）は、今回の地震で校舎に大きな被害を受けています。松蔭には「松蔭リカちゃん」制服キーホルダーがありますが、制服リカちゃんの元祖がこの学校の「ルーテルリカちゃん」のようです。阪神淡路大震災に際してこちらの学校より、いち早い支援をいただいたこともあり、私から先方の校長先生宛に支援金を送付いたしました。この紙面を借りて報告申し上げます。

大災害は確かに神様が私たちに与え続けている試練なのかも知れません。しかし、被災者に寄り添う心、支援する心を持ち続けることにより、この試練を乗り越える姿勢を持ちたいと思います。試練を乗り越えようとするこの姿勢こそ、神様が私たち松蔭の生徒、教職員にお示し下さっていることだと思います。

## 学校の大災害への備え

日本列島は史上何度目かの地震活動期に入ったとも言われています。県内の山崎断層や大阪上町断層など警戒が必要な活断層も多くあります。学校の備えとしては、2011年には全ての校舎の耐震補強工事が終了しており、生徒在校時の大災害発生に備えて乾パンなど食料・飲料水（他に校内自販機は全て災害発生時に利用できる契約）や非常用ブランケットなどを備蓄しています。神戸松蔭（裏面へ続く）

女子学院大学の保管物資も相互供用できるようにしています。生徒在宅時の阪神淡路大震災レベルの大災害発生に備え、居住地ごとに4ブロックに分けて教職員を配置する体制をとり、AM神戸（ラジオ関西 558MHz。中1及び高1生徒全員に案内シールを配布します。）からは学校情報が放送されるようにしています。また、生徒避難訓練は学期に1回ずつで年間少なくとも3回実施する他、神戸市シェイクアウト訓練にも参加しています。ご家庭でも家具の固定など防災・減災の措置や非常食料の備蓄の他、前述しましたように、お子様と、万一の際の動きについてのお話し合いをお願いします。

## 文化祭は盛況のうちに（閉会礼拝の放送から）

4月28日（生徒の部）、29日（一般の部）の文化祭は、初日は神戸市立盲学校の生徒の皆さん、また2日目には1970名のご家族など一般の皆さまをお迎えし、盛会の内に終わりました。2日目には熊本地震の募金活動も行い、被災地支援の意識も持つことができました。

今回の文化祭のテーマ“Colorful”（カラフル）を聞いた時から、私自身、どんな文化祭になるのだろうかととてもわくわくと心躍る気分でしたが、文字通り、講堂の舞台、教室展示、生徒会の校内アートが本当にカラフルで、個性あるテーマで彩られていたように感じました。各文化部の教室展示では、来校されたお客様が熱心に見学し、舞台では各部の舞台と観客席が一体となって演目を成功させた印象がありました。

文化委員長の外川さんが文化祭パンフレットに「カラフル」という今年のテーマについて次のように書いています。「松蔭にはそれぞれのカラーを持った人がたくさんいて、文化祭でその一人一人の個性がカラフルに光り輝くことができるように、という思いが込められています」

松蔭には893名の生徒がおり、893通りの個性が光り輝くよう、文化祭だけでなくいつの時も自分を高めて成長させる努力を重ねて欲しいと思います。また同時に、人の個性も認め、互いに一人の人間として大切にし、大切にされる関係が当たり前になって欲しいとも願っています。最近「他者をリスペクトする」という言い方がよく使われるようになりましたが、単に「尊重」という意味だけではなく、他者の素晴らしいところを率直に、素直に認めて、自分もそのようになれるよう頑張ろう、自分を信じて向上しよう、という思いも込められている言葉だと思います。今回の文化祭で、少しでも自分が成長し、他者もリスペクトできたと言える生徒がいたならば、それはとても素晴らしいことです。今後もこのことを心がけていただきたいと思います。

（4月29日文化祭閉会放送礼拝「校長講話」より）

## 土曜の「おしゃべり会」（保護者の会）のご案内

前号で、相談室（カウンセリングルーム）の開室日の拡大についてお知らせしましたが、保護者のみなさまを対象に、子育てについてざっくばらんに（オープンハートの精神で）語りあう場を提供しようという趣旨で、この会を始めることにしました。学校は教師が生徒に関わることで生徒の成長を促します。教師にとっては、集団のなかでの一人ひとりの生徒のあり方を考えながら生徒に向き合うことが仕事になります。一方で、一對一の深い絆のなかで子どもと向き合う保護者の方々にとっては、一対一で毎日向き合うが故に、時にはしんどくなってしまふことがあります。そこで、「おしゃべりの会」で親同士、心を開いて意見を共有してみたり、相談し合ったり、はたまた愚痴をこぼしあったりする場が大切だと考えています。異なる2種類の大人が、愛情を以て子どもに向き合い、見守り続けている。そのような学校のイメージを思っただければ有り難いです。

「話す」ことは、自分一人で抱えこんでいることを、いったん自分から「離す」こと。わだかまりやこだわりから自分を「放す」こと。カウンセラーの言葉です。テーマを毎回変えながら、2ヶ月に一回程度の割合で開催する予定です。学校側からは私と日永田カウンセラー他が出席する予定です。第一回は5月28日土曜日13時の予定です。ご案内のプリントを別に配布します。どうぞ、ふるってご参加ください。